

第16回研究大会から

研究発表と総会

開会は例年より1時間遅く、かつ特別講演を1時間、発表は1課題につき30分いづれも質問を含めて行ったが、発表課題数が少なかった関係で予定時間内に終了した。

総会ではまづ岡会長ならびに渡辺会員のご逝去について事務局から報告し、中島重徳氏、富岡貢氏には岡会長のご逝去前のことや告別式の模様を話してもらった。

次年度の開催地については、地域性、ゲンジボタルを守る運動の歴史、現在かかえている情勢などから考えて、滋賀県山東町を第1候補として堀江茂雄氏にお願いしていたところ、町および天の川源氏堂を守る会とご相談の結果ご承諾をいただいていたのでその旨を報告し、時期については打合せしてできれば情報交換誌でお知らせすると述べた。

大会雑感

昨年の第15回岡崎大会は、種ボタルの採取やホタル祭りの時期と重なったためか、出席者は期待したほどでなかったので今年はこの時期を避けて、学校の夏休み中に、しかも列車の余り混雑しないうちに7月28日を選んだ。しかし、学校は夏期行事の開始でかえって多忙とのことで関係の方々の出席が悪く、かつ出席されても途中で帰られるなど熟慮の結果が裏目に出て、開催時期を決めることのむつかしさをつくづく感じた。

開場となった東村山市は東京のベッドタウンなのか会場と宿泊を兼ねる共済関係の施設がないので、大会終了後は福生市内の幸楽園に移動しなければならず、東村山市長の歓迎パーティーのあと東村山市内のホタル保護地区を視察するとあっては、なおさら移動が心配だった。しかし、市の職員はたる研究部の方々と前原氏の熟練した案内で1時間余の行程は実にスムーズにいった。そして幸楽園では福生市長ならびに福生のほたる研究会の歓迎の宴などがあって、東村山市と二重の歓迎を受け感謝で一杯だった。

翌日は完備した福生市ホタル公園の養殖施設を、さらに足を伸して多摩動物公園のホタル飼育施設の見学を日程通りこなして終了したことは、ひとえに両市当局ならびに地元会員の方々のご配慮によるもので、紙上をもって厚くお礼を申し上げる。

今大会にはホタルの交信システムについて理学博士の称号を得られた大場信義氏の特別講演があり、かつ日程もスムーズいき誠に充実したさわやかな大会であった。

なお、だ足ではあるが東村山市といえば志村ケンの東村山音頭を連想し抱腹絶倒させられるがほんとうはこれだと近藤邦雄氏がレコードを送って下さって、改めてイメージチェンジをいただきたいである。